
ヘアピンのつくも神

moto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘアピンのつくも神

【コード】

N0538L

【作者名】

m o t o

【あらすじ】

むかし書いたもの。

ヘアピンのつくも神と小学生の女の子の話です。

ああ、今日はイヤな日だったなあ。

はあ、と小さなため息が石黒夏樹からもれた。夏樹は星谷小学校に通う五年生だ。いつもなら学校は楽しい。幼稚園の頃からの腐れ縁の恵美子もいるし、三年生の頃に転校してきて、いまでは恵美子と同じくらい仲良しの由香もいる。

それでも、今日はイヤだった。

あーあ、とまたため息をついてヘアピンを髪から外す。ピンク色のレースとボタンのついた可愛いヘアピンだ。ちょっと早いけどお誕生日プレゼントね、と親戚のお姉さんからもらったピンだった。もらってからずっと、夏樹にとってそのピンは大切なものだった。いつもは癖っ毛でしかたがなくショートにしている髪の毛も、このヘアピンでアレンジしたらすごく可愛く見えるんじゃないかなあ、なんて思っていた。

似合わないのはわかってるけどさ。あんなあからさまにいわなくたっていいじゃない！

そう、「可愛く見えるんじゃないかなあ」という夏樹の小さな希望は今日、学校で思い切り打ち砕かれたのだ。

恵美子も由香も「かわいい！どこで買ったの？」なんてほめてくれた。問題は、クラスメートの加山という男子だ。加山は夏樹を見るなり、

「オトコオンナが頭にリボンつけてきた〜！」

と大騒ぎしたのだ。もちろん、そう言われて大人しく黙っている夏樹ではない。口と拳両方で倍返しにしてやった。ところがそれが悪かった。男子相手につかみ合いのけんかをしたその時から、夏樹のあだ名は「ナツオ」になった。

もちろん、ナツオの才は男の才だ。朝だけで「ナツオ」ブームは終わるかと思っていたら、給食の時間も掃除も時間も「ナツオ」と呼ばれた。結局、一日中夏樹はナツオと呼ばれるはめになったのだ。恵美子も悪ふざけして「ナツオ〜！」なんて呼んでくるし、もう最悪。明日もナツオだったらもう最ツ悪！

全部全部、ピンをつけてったのが悪いんだ。

家の中だけでつけておけばよかった。どうせ、似合いっこないんだから、家の中で一人で楽しんでいればよかったんだ。ぎゅっとピンを手の中で握りしめる。

「あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ！」

変な声がきこえて、びっくりしてまわりを見回した。誰もいない。通学路にいるのは、夏樹一人だけだ。何だったんだろう。不安になってピンをもう一回、ぎゅっとにぎる。

「痛い痛い！ 痛いってー！」

ピョンと飛び跳ねてしまおうかと思った。

……痛い？ 痛いって、私が何かしたんだよね。だって、ここ、他に誰もいないし。

もう一回周りを見してみる。やっぱり誰もいない。おかしいな。首を傾げながら、そろそろとピンを握っていた手を開く。

「あのさ。さつきから、僕に乱暴するのやめてくれない？ あんな力でぎゅっぎゅっやられたら、僕だって痛いんだよね。」

ピンの先に、親指くらいの男の人が背をのばして腰掛けている。夜みたい真っ黒な、夏樹よりもちょっと長めの髪の毛に、深い

緑色の大きな瞳。着ているものは着物のようなものだ。着物のすそはつんつるてんだけれど、顔はとんでもなく整っている。「僕」という一人称と、低めの声がなければ女の人かと思ってしまうくらいだ。

「ばちりと目があうと、その人がにこっ！と笑った。」

今度は夏樹が、「あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ！」と悲鳴をあげる番だった。

男の名前は、無い。「ヘアピンのつくも神」らしい。

これは本人から聞いた。夏樹自身、どうやって家まで帰ったのかはあまり覚えていない。とにかくなんとか帰って、いつもなら直行する台所にも寄らないで自分の部屋に飛び込んで、これだけなんとか聞く事ができた。もっと聞きたい事はあつたけれど、心臓がひっくり返つたようにうるさくつて、なにも考えられない。

九十九年間たつと、ものには魂が宿つて、人間みたいに何かを考へたり気持ちをもつたりするようになるんだよ。

それがつくも神だ、と夏樹はおばあちゃんから聞いた事があつた。

この男の人もそうだっていうの？ 変なの。顔をしかめる。

「つくも神っていうなら、九十九年たつてなきやダメなんじゃないの？ このピン、この前もらつたばっかりなんだけど。」

男の人がぶんぶんと首をふる。

「いや、あのね。つくも神って言うても色々あるんだよ。九十九年どころか何百年もたたなきやなれないのもいるし、僕みたいにすぐになつちやうやつもいるんだから。なれるのに必要な時間は、持ち主の『気持ちの強さ』によって変わるんだ。」

「気持ちの強さ？」

「そう。ナツキちゃんのおばあさんは、『九十九年経つと、ものに

は魂が宿る』って教えてくれたみたいだけど、ちょっと違うかな。ものに魂が宿る時に大切なのは、時間じゃなくって持ち主の気持ち。持ち主の気持ちが強ければ強い程、ものには魂が宿りやすくなるんだ。特に、道具に関係する気持ちが強ければ強い程ね。」

どういう意味だろう？ 自称ヘアピンのつくも神が笑顔を向ける。

「たとえばね。ナツキちゃんが鉛筆を持っていたとする。『もっと頭がよくなりたいな』って強く思いながら勉強していたら、鉛筆にはもっと魂が宿りやすくなる。僕はヘアピンだからそうだな……』もっときれいになりたい』って、ナツキちゃんが強く思ったからつくも神になれたってところかな？」

ギクリ！ 夏樹の肩がはねた。

確かに夏樹は「もっときれいになりたい」という事に近い事を思っていた。「もっと女の子らしくになりたい」。それが夏樹の願いだ。今日だけじゃない。ピンを貰う前からずっとそう思っていたし、ピンを貰ってから、可愛いアクセサリーをいれておく箱にいたピンを取り出しては、このピンが似合うような子になりたいなあ、とため息をついていた。

今日ほど強く願った事はないけれど。本当、加山の鼻をあかしてやりたい！

「心あたりがある？」

男の人がにこりと笑う。図星だ。むむ、と変な声をあげて、夏樹はベッドに腰を降ろした。

「あのさ。僕、ヘアピンのつくも神だっていったでしょ。教えてくれたら、協力できるかもしれないんだけどなあ。」

「ヘアピンに何が出来るの。大体、あんたの恰好かなりみすばらしいじゃない。私をなんとかする前に自分の事、なんとかした方がいいんじゃないの？」

う、と男の人が言葉につまる。体の大きさは親指くらいしかなくても、夏樹よりも年上……多分、十八・九歳くらいだろうか。だけど、年上とは言っても、動作はさっきからなんだかなよなよしているし、なにより自分をヘアピンのつくも神だなんて言うような人だ。怪しい。怪しい人は相手にしない方がいい事くらい、小学生の夏樹でも十分知っている。

「だ、だって……。僕は、ホラ……つくも神としてはまだ新米だし。う、生まれてきたばかりだし……みすばらしくても、仕方が無いっていうか……」

自分のつぎだらけの着物を見て、もじもじする自称つくも神に夏樹もいらいらしてくる。

いらいらした気持ちがたわったのか、自称つくも神がピンを押しにかけておそろおそろ夏樹を見つめてくる。

「出しゃばった真似してごめんね。ただ、ちょっと手伝いたかったんだ。僕がこんなに早くつくも神になれたって事は、ナツキちゃんの気持ちがよくばど強かったって事だから。そんなに強い気持ちがあるなら、叶えるお手伝いが出来ないかなあって、思っただけだったんだ」

「ホラ、僕、神様の端くれだし」なんて、その自信はどこからくるんだらう……ボロボロの服着ていて、偉そうな所なんて欠片もないのに。

付け足された言葉に少し呆れたけれど、自称つくも神が言った事

に気もちもちよつとだけ変わりはじめた。少し、手伝ってもらってもいいかも、なんて思いはじめてしまった。

「わかった。そんなに言うなら手伝ってもらおうじゃない。私のこと、女の子らしくしてくれるんでしょ？」

ぱつと自称つくも神がきれいな笑顔を浮かべる。

あまりにもここにこしているものだから、夏樹が「何でそんなに嬉しそうなのよ」と聞いたら、「人が幸せになれる手伝いが出来てうれしいんだ。神様みたいでしょ。」と間抜けな返事が返ってきて、「みたいもなにも、アンタ神様なんじゃなかったの？」と脱力しそっくなつた。

それでも、いつまでも「あんた」だとか、「自称つくも神」だとかよつとなあ、と思つて、夏樹も呼び名をつくつた。「ツウさん」だ。

つくも神の最初の一字をのばして、『ツウ』、それに年上に見える事と神様の端くれ、という言葉聞いていたから、『さん』をつけた。

「じゃあ、よろしくね。ツウさん。」

ツウさん、と名前を呼ばれて、その深緑色の瞳が嬉しそうに輝いた。

*

「ダメだよ、ナツキちゃん。湯のみは、両手で持たなきゃ。」

「はいはい。ちよつと間違えちゃっただけ。」

「返事は一回！」

朝ご飯を食べていると、横からツウさんの指導が入る。

お母さんがもう一人できたみたい。はい、と返すと、ヘアピンに腰掛けたツウさんがこくりと頷いた。

あれから一ヶ月。夏樹は、ツウさんとマンツーマンの「女の子っぽくなるためのレッスン」の真っ最中だ。レッスンとはいっても、お稽古のように向き合ってるわけではない。ご飯を食べている時、髪の毛を乾かしている時、いつだってツウさんが突っ込みを入れてくる。

お風呂やトイレからは「入ったらキャラメルあげないからね！」を殺し文句にして、追い出している。

ツウさんはキャラメルが好物だ。好物、とはいっても食べるわけではない。お供えものみたいにしておいてもらえば、お腹が一杯になるらしい。「食べようと思えば食べられるけど、普通に食べたら食べ物が今の僕には大きすぎるからね。」と言っていた。

それでもキャラメルが好物なんて変なの、と夏樹としては不思議な感じだけでも、キャラメルを目の前にしたツウさんはいつも嬉しそうだから気にしないことにした。

『女の子っぽい仕草の練習』の言い出しっぺは夏樹だ。ツウさんの動きを見ていて思いついた。ツウさんの体の動かし方は、男の人だけれど指一本一本まで優雅だ。その動きを真似すれば、自分もキレイに、女の子っぽくみえるんじゃないか。夏樹はそう思って、ツウさんに指導をお願いする事にした。

でも、これが思っていたよりも大変だ。夏樹は三人兄弟の末っ子だ。上が高校生で、その次が中学生。両方とも兄だ。ずっと男兄弟の中で育ってきた夏樹には、ちょっとだけツウさんが言う通りにするのは気をつかう。だけど、やれば自分も結構女の子っぽくなれるんだなあ、と思うとなかなか楽しい。

「うん、そうそう。上手上手。」

ツウさんがほめてくれるのもあると思う。両手でお茶を飲んでいると、ツウさんがそうだ、と手をつった。

「ナツキちゃん、動作も前よりもずっとよくなったよ。もう牛乳ラッパのみとかしないでしょ？」

「してない、始めっから！」

「冗談冗談。で、それはおいておくとしてさ。そろそろ、僕をつけて学校にいつてみない？ 今のナツキちゃんだったら、前よりももっと似合うようになってると思うよ。」

「ええー……。」

渋る夏樹に対し、ツウさんはにこにこしている。

ツウさんが言っているのは、ツウさんがつくも神としてとりついている、レースのヘアピンをつけて学校に行かないかという事だ。

夏樹だって、ピンをつけたくないわけではない。あんなに可愛いピン、つけられるなら毎日つけたいくらいだ。

「だけど、学校につけていたら、また「オトコオンナが頭にリボンつけてきた！」ってからかわれるんじゃないかな、と思ってしまう。」

「大丈夫だよ。ね、ちょっとつけてみようよ。」

「ううん……。やめところかなあ。」

「なんで？」

「だって。ツウさんを学校に連れていくわけにはいかないじゃない。ツウさんを見たらみんな大騒ぎよ！」

「なんだ、そんなこと。心配ないよ。僕、ナツキちゃん以外に見えないもの。」

「からりとツウさんが笑う。えっ、と夏樹は思わず体をのりだした。」

「どづいづいと?」

「うん。あのね。僕はナツキちゃんの『思い』から出来てるわけ。だから、大抵の場合はナツキちゃん以外には見えない。靈感が強いと、見えちゃうかもしれないけど……でも、まあ、僕も隠れているようにするからさ。大丈夫だと思うよ。」

「そ、そこまでいうなら……つけてみようかなあ。」

「ホント? じゃあさっそく! 思い立ったが吉日って、昔っからいうでしょ。」

ツウさんがぴよんぴよんと机においたピンの上で飛び跳ねた。

つくも神のツウさんは、ピンからあまり離れた所にはいけない。離れてもせいぜいピンから六十センチくらいまでだ。

座っているツウさんごとピンを持って、夏樹は洗面所に向かった。

うっ、どきどきするなあ。

ぎゅっと唇を引き結んで、背負ったランドセルの肩ひもをぎゅっと掴みながら通学路を歩く。頭の上では、目玉おやじみたいに髪の毛の中にもぐったツウさんが「大丈夫だって!」と励ましてくれるけれどやっぱり不安だ。

通学路の途中にある、大きなガラス窓のある家の前でちょっと立ち止まってみる。鏡のようになってるガラス窓に、夏樹がうつる。うん、きつと、大丈夫。今日は服だって、髪の毛に合わせていつもよりも可愛い服を選んだ。

肝心のヘアピンをつけている髪も、いつもとちょっと違う。ただ可愛いピンをつけるだけじゃなくて、ショートヘアだけれど少し前髪の部分を三つ編みにしてみた。その三つ編みの端を耳の前でピンでとめたから、もつと可愛く見えるはず。大丈夫、大丈夫。ツウさんの言う通りなんだから。

こくり、と夏樹は小さく頷いた。

ついでに言うならば、ツウさんの着ている着物も今日はちょっと違う。今まで着ていたのがあんまりにもみすばらしいから、夏樹がハンカチで作ってあげたものだ。家庭科だって得意じゃないから、あんまりいい出来とは言えないけれど、ツウさんとしては「今まで着ていたのに比べたらずつといいよ!」と大満足らしい。

「おはよう、夏樹!」

バン、と後ろから勢いよく背中を叩かれる。

「ん、おはよう、恵美子!」

「あれ? 夏樹、今日は全然ナツオじゃないじゃん! すごく女の子っぽくて可愛いかんじ。イメチェン?」

「うん。そんな所かな。ちょっと変えてみようかなー、なんて思ってた。」

「そうなんだ。いつもとちょっと違うけど、でもそういうタイプも可愛いね。ピンもすごく似合ってるし。」

恵美子は思った事をバンバン口にするタイプだ。あんまりお世辞は言わない。

ほめてくれてる、とちょっとニヤニヤしてしまつ。

頭の上で、ツウさんが「ほら、やっぱり僕が言ったとおりでしょ!」とぴよんぴよんとびはねるから、夏樹は頭をぎゅっと押さえた。

「どうしたの?」

「ううん、なんでもない。それよりも、昨日の『お笑いテン』見た?」

見た見た!と恵美子が体を乗り出してくる。『お笑いテン』の話

をしているうちに学校について、上履きに履き替えたときもまたポン！と背中を叩かれた。学級委員の飯田栄助だ。他の男子にくらべて大人っぽいと人気がある。

「おはよ、石黒。あれ？ 今日、何か感じ違うね。」

「変かな？」

「いや、いつもと違うけど、でもいいと思うな。女の子っぽくて」

飯田君は優しいから、もし似合ってなくてもほめてくれる。

そう分かっていただけけれど、それでもやっぱりほめてもらえて嬉しい。

照れ笑いをすると、恵美子がからかうように横やりを入れてくる。けれど夏樹以上に「ほらね！ ほらね！」とツウさんが頭の上でハイテンションで飛び跳ねている。

またぎゅうぎゅう押さえつけながら、恵美子と二人連れ立って教室に向かう。

「おはよー」といつも通り教室の扉をあけると、クラスメートやもう先に来ていた由香から、「おはよー」と返事が返ってくる。夏樹の髪をみて、あつと女子や由香が声をあげた。

「あつ、可愛い！ 夏樹、どうしたの？」

「そういうのも似合ってたじゃん！」

わやわやと夏樹の机のまわりに人が集まってくる。

そのへアアレンジどうやったの？なんて聞かれると、夏樹だって悪い気持ちはしない。にこにこしながら、ツウさんと一緒にやったアレンジのコツを教えてあげる。

きゃあきゃあ騒いでいたら、バン、と机を叩く音がした。みんなで音のした方を振り返る。加山だ。

「なんだよ、きゃあきゃあ騒いで。またオトコオンナが何かしたつてのかよ」

「オトコオンナってなによ、このバカ山！」

かちんときて言い返した夏樹に、加山も負けじと口を開く。

「だってオトコオンナじゃねえか！ 大体オレはバカ山じゃない！」

「加山、何夏樹の事からかってんのよ！」

「あ、もしかして夏樹の事、好きなんじゃないの？」

「なっ……。」

加山が固まって口を魚みたいにぱくぱくさせる。その様子を見て、またきゃいきゃいあたりが騒がしくなる。

「うわ、赤くなってる！」

「なっってねえよ！」

まわりがやいのやいのと騒がしい。けれど、夏樹の気持ちはさつきとは違ってかわって真っ黒だ。

一ヶ月間頑張ってみたけど、やっぱりダメなのかな。オトコオンナはオトコオンナのままなんだ。自分の席に座ったままがっくり頂垂れていると、そろそろとツウさんがほっぺたのあたりまで滑り降りてきて、ぺちぺちと頬を叩く。

「ナツキちゃん、ナツキちゃん。」

「……何よ。」

「い、言われた事だけだよ。全然気にしないでいいって僕は思うよ。あの子以外はみんな、ほめてくれたじゃないか。」

それはそうだけど。でも、一番私の事を「オトコオンナ」って言

つてた、加山をぎゃふんと言わせなきゃ、意味が無い。

髪の毛からピンを外す。ピンにしがみついたツウさんが心配そうな顔で見えていたけれど、ふいと視線をそらす。もうすぐ朝の会がはじまるころだが、加山が中心になっているけんかはまだおさまりそうにない。いつもなら、バンバン言い返してガンガンけんかにも参加する夏樹でも、今はちよっとそんな元気がでそうになかった。

「大体、オレはこいつがこんなピンしてくるから……。」

外して机の上においていたピンを、加山がぎゅっと握った。

ツウさんが驚いたような悲鳴をあげて、ハンカチで出来た服の裾をばたつかせる。

「え、ち、ちよっと……、ま、待って！」

ツウさんが苦しそうだ。今、ここでツウさんの姿が見えるのは夏樹だけだ。加山があんなにギュウギュウにぎったら、ツウさんだつてきつと痛いに違いない。

「何だよ！」

加山が振り向いた勢いで、ポロリとピンが手から落ちこちる。カッーン、と小さな音がして、ピンが床に叩き付けられる。

あっ、と周りのクラスメートが声をあげた。夏樹も勢いよく椅子から立ち上がった。

ピンは机の下に転がっている。ピンには、つくも神のツウさんが憑いている。神様の端くれだからねと自分で自信たっぷりに言っていたくらいだから、これくらい、なんともない筈だ。

心配で胸がドキドキする。本当に、本当に大丈夫なのかな。

ピンを拾い上げて、「ツウさん」とまわりには聞こえないよう、

小さな声で呼びかけてみる。ピンの周りに、ツウさんの姿が無い。ドキドキがバクバクになって、胸の中で心臓が飛び跳ねる。手の中のピンをひっくり返して、頭の中が真っ白になった。

ピンにくっついていた飾りのボタンが取れてしまっている。

ツウさんは、ヘアピンについているつくも神だ。だから、ご飯を食べなくても大丈夫だし、ちょっとくらい乱暴にされたって潰れたりなんかしない。

けれど、本体のピンが傷ついてしまったらどうだろう。ピンが壊れてしまったら、ツウさんもいなくなっちゃうんじゃないのかな。ピンは、ツウさんも同然なんだから。

ツウさんがいなくなっちゃうなんて嫌だ。そんなの、絶対に嫌だ！ ツウさん、ともう一回こっさり呼んでみたけれど、どこにもツウさんの姿はない。壊れてしまったピンが転がっているだけだ。

目の奥があつくなくて、ぼろりと涙が床に溢れた。

周りで夏樹の様子をみていたクラスメートがざわめく。加山もきまり悪そうに口をへの字にしている。

丁度その時、先生が入ってきた。

「どうしたんだ、石黒。具合悪いのか？」

先生に話しかけられた途端、ボロボロ涙が止まらなくなる。恵美子がそつと肩に手をのせてくれた。

「夏樹……ね、ちょっと保健室行こうよ。落ち着くまでさ。ね？」

答えられずにうなだれている間に、「ちょっと連れて行ってきます」と恵美子が手をつかんで立ち上がらせた。ずるずる引きずられるようにして、保健室に連行される。

ヘアピンを教室におきっぱなしにしてきちゃった。

廊下を半分くらいきた所で、その事に気がついた。だけど、今手

元になくてよかったかもしれない。今持っていたら、いつも小さな手でぺたぺたほったを叩きながら励ましてくれるツウさんはいないんだって分かって、もっともっと辛くなる。

恵美子が優しく背中をなでてくれたけれど、涙がますます廊下にこぼれた。

ワンワン泣いて、気が付いたら眠っていた。目がさめたときは、もう給食の時間だった。

「目、覚めた？」

「保険のりかこ先生が椅子をくるりとまわして夏樹の方をむく。こくり、と夏樹は頷いた。

「じゃあ、給食食べたらもう教室に戻れるわね。体調は大丈夫？」

辛かったら、おうちの人に迎えに来てもらっけど……。」

「大丈夫です。ありがとうございます。」

「ちよつと前にクラスの子も心配して見に来たわよ。あ、今また来たみたいね。丁度よかった、今起きた所なの。」

りかこ先生が、保健室にきた誰かに手招きをする。

恵美子かな、それとも由香かな。恵美子にはちゃんとお礼を言わなくちゃ。ぐずぐずないていたのを励ましながら、保健室まで連れてきてくれたんだから。

泣いていた理由を思い出すと、また鼻の奥がツンと痛くなった。

シャツと鋭い音をたてて、カーテンが開けられる。そこにいたのは、恵美子でも由香でもない。加山だった。驚いて目をおおきく見開いた。

「……おはよう」

きゅつと夏樹は唇を噛んだ。

加山が、ピンを投げたりしなければツウさんは今もここにいた筈なのに。シーツをつかむ手がわなわな震える。

「ごめん、石黒。ピン壊して、ごめん。」

加山が手をぐいと夏樹の方につきだす。無理矢理渡されたのは、ボタンが取れてしまっていたヘアピンだ。けれど、取れてしまっていた筈のピンがつけなおされている。

「直したんだけど、前みたいには上手くいなくなってる……。」
「……うん。」

ボタンはボンドでくっつけられている。キレイに直っているけれど、前に比べたらやはり少しボタンが歪んでいるようにも見えてしまう。

でも、加山が直そうと思ってくれたのは嬉しい。

「……ごめんな、石黒。悪かったって、思ってる。」

加山とけんかしたことは数えきれないくらいあるけれど、こんなに素直に謝られるのははじめてだ。

「いいよ、私だって悪かったもん」

加山が首を振る。

「石黒は悪くない。ただ、今日はいつもと違う風だったから、悪ふざけしてからかって……それで、石黒のピン壊して。オレが悪かったんだ。ごめん。」

「加山……」

「オトコオンナだって散々からかったけど、だけど、ピン、似合っていないこともねえよ。石黒はやっぱりオトコオンナだけど、……でも、他のヤツがいうとおり、今日みたいに女っぽいのも、似合ってたよ」

言ってることがめちゃくちゃにもほどがある。

けれど、気持ちはすっきりした。胸につつかえていたものがすうっと溶けるような気持ちがあった。

ツウさんの事はもちろん、ものすごく悲しい。

でも、ツウさんと一緒に目指した「女の子らしさ」が似合わないわけじゃなかったんだって、加山の言葉を聞いてやっと思えた。

……私だって、女の子らしくなれたよ。ツウさん。
きゅっとピンを握る。

「あいた！」

小さな声にぎよっとしてピンを手放した。

シーツの上に落ちたピンの後ろに、黒い髪の毛が見える。頭をおさえながら、親指くらいの大きさの体がい出してくる。

「つ、つ……ツウさん!？」

「い、石黒。どうしたんだよ？」

夏樹はツウさんと加山を交互に見た。そうか、加山にはツウさんが見えないんだ。「なんでもないよ。」と無理矢理ごまかして、ひそひそ話をするためにツウさんのピンを口元に持っていく。その間にツウさんがピンに肘をかける。よっこらせ、と腕を持ち上げる様子は大分疲れているようにも見えるけれど、でもどこからどう見てもツウさんだ。

「おはよ、ナツキちゃん」

「『おはよ』じゃないわよ！　だ、大丈夫なの？」

「うん。一応、平気だよ。ボタンが取れた時はそりゃもう、姿が保てないくらいすごく痛かったさ。でもホラ、その子につけなおしてもらえたしね」

ちらりとツウさんが加山に目をやった。

加山は全然気付いた様子がない。

ふう、とためいきをついてツウさんが肩をすくめる。そうしてあげた顔は、少し悲し気な顔だった。

「だけど、再会できたのはすごく嬉しいけど……やっぱりナツキちゃんと一緒にいるのは多分、今が最後かな」

なんで！

やっぱり、ボタンが一回はずれちゃったのがダメだったの？　ボ

タンの他にも欠けちゃったところがあつたの？

ぐるぐると夏樹の頭の中を疑問符が駆け巡る。

「僕は、ナツキちゃんの『気持ち』から出来ているっていったでしょ。ナツキちゃんの気持ちが強かったから、僕はつくも神になれた思い出してみて。ナツキちゃんが、強く思ってたことって何だった？」

「……『女の子らしくなりたい』。」

「うん、そう、それなんだ。ナツキちゃんは、今までずっとそう思っていた。だから僕が生まれた。」

にこりとツウさんが笑う。その笑顔に夏樹はまた泣きたくなった。ぺたりと小さな手が頬に触れる。

「でも、今、ナツキちゃんは『女の子らしくなれた』って、自分で思えたよね。自信が持てたんだ。そうなったら、もう夏樹ちゃんの『女の子らしくなりたい』っていう願いはなくなる。僕を『つくも神』にしていた気持ちはなくなるんだ。だから僕はもう、これ以上『つくも神』ではいられない。」

嫌だ。嫌だ、そんなの嫌だよ、ツウさん。

「私、まだ全然女の子らしくなんてない。ツウさんがいなくなっちゃうなんて嫌！」

小さな声で、加山に気付かれなないように必死でツウさんに言った。それでも、ツウさんはゆっくり首を横に振る。

「ナツキちゃんは、僕と一緒に色々する前から、ずっと女の子らしいよ。僕に、こんな服も作ってくれたじゃないか。嬉しかったなあ……。」

ツウさんが嬉しそうにハンカチで作った服を広げてみせる。

そんなの、全然立派でもなんでもない。ハンカチを切って縫い合わせた、てるてる坊主みたいな服じゃない！

ほろりと一度おさまったはずの涙がまた夏樹の目からこぼれる。

それをツウさんが拭って、おどけるようにふう、と吹き飛ばすような仕草を見せる。

ツウさんの指の先が透き通っている。今度こそ本当に、いなくなっちゃうんだ。

「ツウさん、嫌。こんなの嫌だよ。私、女の子っぽくなれたなんて思っていない。ツウさんがいなくなっちゃうくらいなら、これからだってそんなこと、絶対思わないようにするから！」

「ナツキちゃん、そんなこと言わないで。自信持つてよ。ナツキちゃん立派に女の子らしいよ。それに、僕だつて神様の端くれだつていったでしょ？ 死ぬ訳じゃないもの。きつとまた会えるさ」

何いつてるのよ、ツウさん。つくも神じゃいられないっていったじゃない。つくも神じゃないなら、一体何になるっていうの？

そう言いたかったけれど、押し殺した嗚咽がひくつと夏樹の喉をならして、結局何も言えなかった。

「つくも神の次はね、僕はもつともつと強い神様になれるように修行に行くんだ。消えるわけじゃない、本当だよ。いままではヘアピョンとナツキちゃんの気持ちが僕の依り代だったけれど、これからは山の神様や、川の神様のところに行こうと思う。ナツキちゃんが女の子らしくなるために頑張ったみたいに、僕も立派になれるように頑張るから。」

そんなの信じられない。

ぶるぶると夏樹は首を振る。

ツウさんは優しい。だから、もしかしたら本当は消えちゃうかもしれないのに、ウソをついているのかもしれない。夏樹を安心させるために、「僕は消えないよ。」と、そう言ってくれているのかもしれない。

夏樹の気持ちを汲み取ったように、ツウさんがうつん、と唸った。

「うつん、そうだなあ。じゃあ、約束しようよ。」

「約束？」

「僕がナツキちゃんのことを守れるくらい、立派な神様になれば、絶対ナツキちゃんの守り神になるって約束するよ。ね？ その時までに、ナツキちゃんも僕の次の服をもつと上手に縫えるようになっていてよ。このハンカチの服を持って絶対会いに行くからさ。」

ツウさんがとてもきれいに笑った。指だけじゃない。もうツウさんの体全体が透き通っている。

気付いたら、夏樹はこくりと頷いていた。ツウさんの言葉を信じよう、と思っていた。

「……約束だからね」

「うん。神様はウソつかないよ。絶対にね。」

またね、ナツキちゃん。

そうして、ツウさんは空気にとけるようになくなった。

涙が次から次にあふれだす。突然泣き出した夏樹に加山は困ったような顔をして結局黙ったままそつと隣に座ってくれたけれど、その時の夏樹には「どうして泣いているんだ」という質問に上手に答える事ができなかった。

ツウさんの事しか考えられなかった。

絶対、絶対、約束だからね。神様なんだから。

何度も何度も、その言葉を頭の中で繰り返した。

あれから三年。

中学二年生になった夏、夏樹はずつと苦手だった家庭科ではじめて五を取った。授業でつくった刺し子は、県の文化祭に出品されて、金賞をもらった。金賞をもらうのなんて、小学校一年生の頃の習字以来だ。

ツウさんの為の着物を縫うのも、大分上手くなった。

ハンカチで出来たのなんかじゃなくて、立派な神様になったツウさんに渡すのに十分なものをつくらなきゃ。

あさぎ色に、紅色に、かすり模様。色々な生地で作ったけれど、

やっぱりツウさんに一番合うのは、目と同じ深い緑色だ。

今縫っているものがその深い緑色の着物だ。深い緑色に、銀の花の入った帯。ツウさんにすごく合うと思う。あれからツウさんにはまだ一度も会っていないけれど、似合うと断言できる。

糸をとめたらもうおしまいだ。

はさみで糸を切って、机の引き出しをあける。ツウさんの大好物だったキャラメルを取り出して、着物の中に入れて置く。よし、これで完成！

いつもキャラメルを積んでいる窓辺に着物を持っていく。キャラメルを窓辺に積んでいるのは、ツウさんが来たらすぐわかるようにするためだ。キャラメルを積んでおけば、ツウさんなら絶対に飛びついてくるに決まっている。

そこで、窓辺にきれいに置まれた布がある事に気がついた。見覚えのある布……そうだ、三年前、ツウさんに作ってあげた服につかったハンカチだ！

飛び上がる勢いでカーテンをめくり上げる。

カーテンの向こう、積んでおいたキャラメルの上に、にこにこしながら誰かが座っている。

「ね、神様は嘘つかないって、僕が言ったとおりだったでしょ？」

「ツウさん！」

花がさいたような笑顔で、ツウさんがナツキ、と懐かしい響きで名前を呼んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0538/>

ヘアピンのつくも神

2010年10月15日18時24分発行